

「戦争・暴力の反対語は、 平和ではなく対話です」

—地球市民の書棚から②⑧

地球市民 大村 昌宏



* 2015. 5/9 自宅にて mo

「戦争・暴力の反対語は、平和ではなく対話です」これは暉峻淑子（てるおか いつこ）さんの言葉です。戦争・テロ、暴力は「負の連鎖」を生むだけ。平和は待っているだけではこない。「人類には、対話という共有の資産がある。これを育て・根づかせること」だ。今回は、この「対話」について考えます。

さてこの写真のかわいい彼女は「マリー」といいます。彼女はしっかりアイコンタクトをとってくれています。彼女が我が家に来たのは 16 年前。チビッコギャングの来客があるたびにキャンキャンと一緒に柱の周りを走り回っていました。そんな彼女が 6 年前、突然後ろの両足をペタッと引きずり歩けなくなってしまいました。獣医の見立てでは犬種特有のヘルニアとのこと。手術しても回復しないと宣告されてしまいました。しかし奇跡が起きたのです。最初はヨタヨタ、そしてスタスタと歩けるようになったのです。その代り大きな犠牲がありました。排泄がダダ漏れになってしまったのです。それ以来、マリーは、オムツを常時装着する「介護が必要な犬」になってしまいました。今、彼女は人間の年齢に換算すれば 80 歳。一日のほとんどを敷布に包まって寝ています。部屋に入ると敷布の隙間から鼻先をだし目だけが私を追いかけてきます。

「犬と人間 目と目で通じあう、特別な絆」

こんなタイトルの記事がありました。(朝日2017/2/12)。そうマリーとは「通じ」あえるのです。犬にはコミュニケーション力がある。そして人を「癒(いや)し」てくれる。今この犬の「癒し力」が、子育てや介護、医療の現場で活用されつつあります。

犬には、なぜそのような能力があるのでしょうか。犬の祖先である狼(おおかみ)の集団生活と関係があるようです。狼は群(むれ)で生きることによって命を繋いできました。群れで獲物を狩り、害敵から身を守り、子を生み育てる。群れという集団生活の中でコミュニケーション能力や社会性が育まれたのかもしれない。

犬は、最古の家畜と言われ、人と犬の関係が始まったのは 5 万年～1 万 5 千年ほど前です。食料とされた時もありますが、注目したいのは人の傍らに丁重に埋葬されていることがあることです。古代人にとって犬は「友」でもあったのです。

さて犬のコミュニケーション力についてです。犬は、人の動向や感情を読み取る能力に優れているようです。その一つに「視線」があります。実は人間と犬は、白目と黒目がハッキリしていて「視線」が分かりやすい動物です。犬は飼い主の視線を素早く読み取り、行動することができるのです。「目は口ほどにものを言う」と言いますが、黒目の動きを観察すれば、その人の情動を察知することもできます。

犬の感覚器官の発達は人と大きく異なります。彼らの脳に描かれる世界も人と大きく異なります。人間の一万倍もすぐれた臭覚は、固体認識と抜群の記憶力の背景にある

かもしれません。「犬は三日の恩(おん)を忘れない」という特性は、人間のココロをくすぐります。

- 人と犬の関係については、菊水健史さんの研究が興味深い。犬を伴侶動物と位置づけそのコミュニケーション能力を紹介している。菊水健史・永澤美保 著「犬のココロをよむ 伴侶動物学からわかること」(2012年 岩波書店)
- 犬とのつきあい方を実践にもとづき紹介してくれているのが盲導犬訓練士の多和田悟さん。
多和田悟 著「犬と話をつけるには」(2006年 文藝春秋)

暉峻淑子さんの呼びかけ

暉峻さんは「対話する社会へ」(2017年 岩波書店)の中で「戦争・暴力の反対語は、平和ではなく対話です」と呼びかけています。テロ・戦争、暴力の負の連鎖を前に無力感すら感じる今、希望と勇気をあたえてくれる言葉です。

暉峻さんは、この本で「思想としての対話」について語っています。そして発達心理学や教育学の研究成果を紹介しながら「対話」が「人間の本性的なもの」であるとしています。

暉峻さんご自身の 89 年の人生における「対話」についての経験も述べています。研究者としてのドイツでの経験や難民支援を行ってきたコソボなどの紛争地で、日本での市民活動での対話について次のように整理しています。

- ✓ 対話は、議論して勝ち負けを決めるとか、意図的にある結論に持っていくとか、異議を許さないという話し

方ではない。

- ✓ 対話とは、対等な人間関係の中での相互性がある話し方で、何度も論点を往復しているうちに、新しい視野が開け、新しい創造的な何かが生まれる。両方の主張を機械的にガラガラポンと足して割る妥協とは違う。
- ✓ 個人の感情や主観を排除せず、個性も感情も含めた全人格を伴った自由な話し合い方が対話である。
- ✓ 言葉の本質は対話の中にある。官の言葉、司法の言葉、政治家の演説、教科書など、いわゆる記述式の様式が、明治期に標準化された。しかし人間の言葉の始まりは対話であり市民の言葉は対話である。
- ✓ 幼児が生まれてはじめて聞く言葉は親が注ぎかける対話の言葉であり、子どもは生まれながらにそれに応答する能力をもっている。

暉峻さんと言えば、日本社会がバブルに浮かっていたころ**「豊かさとは何か」**(1989年 岩波書店)で「その繁栄は砂上の楼閣」であり「経済の繁栄が国民の生活の質を高め、社会福祉を行きわたらせる」ことこそが大切といち早く指摘していました。

バブルが弾けた後、小泉政権の「規制緩和」「自己責任」論は、「競争の激化」と「格差社会」の拡大をもたらしました。これに対し、暉峻さんは**「豊かさの条件」**(2003年 岩波書店)で「人間社会を維持するためには、支え合い、連帯し、協力する共同の部分が必須」と呼びかけました。

そして格差社会が拡大し「自己責任」

「個人化」が進み無気力感がただよう中、**「社会人の生き方」**(2012年 岩波書店)で、「社会は変えられる。そのために個人はどんな生き方をすればいいのか」と問いかけられました。

そう暉峻さん自身が、社会経済の転換期毎に、私たち日本の市民に対し、日本の社会経済の「ありよう」について、私は生活経済学者としてこう思うと対話を呼びかけてきたのです。

「戦争・暴力」に屈しない、「平和とは受け身でなにもしないことではない」「平和も民主主義も努力してつくっていくものだ」。「人間が多年の経験の蓄積の中で獲得した対話という共有の遺産を、育て、根づかせることが、平和を現実のものとし、苦悩に満ちた社会に希望を呼び寄せる一つの道ではないか」。暉峻さんの「対話する社会へ」の呼びかけをしっかりと受けとめ、この対話に参加していきたいと思えます。